
アクセスがない男の話

部屋内妄想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクセスがない男の話

【Nコード】

N8216U

【作者名】

部屋内妄想

【あらすじ】

上手いあらすじが書けないのも

アクセスが少ない一つの理由かもしれない

チカチカと明滅するパソコンの画面。

薄暗い六畳間で唯一の光源のそれが映し出していたのは、無情な数字だった。

とある小説投稿サイトのとある作品のアクセス解析画面。観た人数を如実に示す数字は『0』が幅を利かせていた。それは無を意味する。

今日のアクセスも、昨日のアクセスも『0』。一昨日も、その前日も『0』。遡っていつても『0』が続き、時折思い出した日のように『1』、『2』が出てくる。

その画面を睨むように見る男は、人相悪く顔を歪めギリギリと歯ぎしりをする。

「くそっ！」

吐き捨てるように言い、男は画面を拳で殴りつけた。プロボクサーでもない彼のパンチでは液晶にヒビも傷も付けられず、

「いつてえ……」

肉体的には男の拳だけが痛んだだけだ。だが、心も痛む。画面に映る虚しくアクセスを告げる数字を見て、その悔しさを物にぶつけた自分自信に。

既に分かっているだろうが、この悲しき数字は彼が投稿した作品のアクセス数である。

彼は他人作品のアクセス数に感情を露わにする性格ではない。せいぜい同じようにアクセスがない作品を見て内心ほくそ笑む程度だ。彼の趣味は小説。読むのも書くのも好きで、細々と書き続けてきた。あくまでも趣味であり、出版社に送ることはもとより、友人他、誰にも見せたことはなかった。そもそも彼には友人と呼べる者はいなかった。

快適とはほど遠い労働環境。あくせく働けども賃金は雀の涙。楽

しいこともなくただ生きるために働く日々。

疲れた身体を引きずるように帰宅し、安いコンビニ弁当を口にしながらキーボードを叩いて物語を紡ぐ。他に趣味がない彼にとってそれが唯一の楽しさを感じられる時間だった。

そんな生活が続き、彼の書いた物語は結構な長さになってきた。そして彼は思う。

(自分の小説は面白いのだろうか)

自分が書いた作品を自ら面白いと評することは誰にだってできる。彼が知りたいのは他人からの評価だ。

これまで他人に見せることもなく、他人からどう思われようが自分の好きなように書けばいいと書き続けてきた。

しかし、書けば書くほど他人に見てもらい、感想を貰いたいという欲求が高まってくる。

前述の通り彼には友人がいない。仮にいたとしても、面と向かって感想を訊くことはできないかもしれない。暗い趣味だと笑われるかもしれない……そんな不安が過ぎり、打ち明けて読んでもらう勇気がでないだろう。

そこで彼が目を着けたのは小説投稿サイトであった。

ここでなら自分を隠したまま、小説の内容だけを評価してもらえらる。光の扉に飛び込むように彼は早速登録し、投稿した。

正直、自信はあった。

自己評価でも愚作とするような数々の文字のゴミ山を積み重ね、それらを礎に完成した最高傑作　のはずだった。

人気が出て、そのサイトの中で『これだけは読んどけ』と言われるような作品になり、感想も多く返信が大変で困る　そんな未来像はあっけなく崩れ去った。

感想、お気に入りが『0』

更新した当初は二桁はあったアクセス数も日に日に減り、一桁、ついに「0」となる。

当初アクセスがあつた理由は、纏めて投稿して完結まで送つたため、新着をたまたま読んだ人がいたからなのだが、それを知ると彼は気持ちの底なし沼に埋もれてしまつたろう。

彼の明るい未来図とは正反対の暗澹たる結果に、意気消沈し彼は書くことをやめていた。

けれども唯一の趣味。少し経ち、彼の執筆への灯火は日に日に大きくなっていき、彼は再び書くことを決めた。

今度は人気になる作品を書いてやるといふ目標を立てて、まずは過去の散々たる結果を次の作品への燃料にしようと見た次第だ。

はたして、その燃料は一瞬だけ彼の怒りに火を付けただけで、逆に彼の情熱を冷まさせることとなる。

缶ビールを片手に、虚ろな目でサイト内で人気とされている小説を巡る。

「……ファンタジー……異世界……チート……トリップ……天性……こんなんばかりじゃねーか」

トップ20にランクインしている小説をクリックしては、読者を引きつける撒き餌のように連なるキーワードを呟いていく。

「何でこんなのが人気あんだよ……意味わからねー……それなら俺の方が面白いだろ絶対によ……」

と、ほろ酔い状態の彼はグチるような口調で妙な自信を見せるが、それらの人気小説を口々に読んだことはない。

テレビゲームに無縁な人生を送ってきた彼は、ファンタジー世界というものがよく分からない。そしてファンタジー小説というものもほとんど読んだことがなく、人気作品が面白いとは思えなかった。

「……これが主流なのか？」
彼は天井を仰いで誰もいない空間に問う。

「そうか……これらを入れた物語を書けば人気ができるのなら、俺が書けばトップ間違いなしじゃないか」

答えは返つてはこなかったが、彼には何かか聞こえたのか、フフ……と不敵に笑う。
アルコールによる影響か、今の彼には溢れんばかりの自信が迸っていた。

「なら書いてやるうじやねえか。……と言いたいが、まずは知識を得ないと始まらないな」

ひとりごちながら、彼はフラツキながらも立ち上がり部屋を飛び出すように出て、本屋へと向かった。

彼が部屋へと戻ることはなかった。
なんてことのない交通事故であった。

目撃者の話によると歩行者側の赤信号でを無視して渡った男に車が　という、酔っぱらった男が注意散漫の末に巻き込まれた、たったそれだけで片づけられる程度の事故。

当たり所が悪く、彼は運ばれた病院で息を引き取った。

だが、彼の人生はまだ続いていた。

「は？　間違い？」

白い空、白い雲が敷き詰められた空間。そこにある文化遺産を思わせる石造りの神殿。その中に彼はいた。

彼の目の前には、まるで綿飴のような立派な髭を蓄えた老人が立っている。彼は自らを神様だという老人を訝りつつも、車に跳ねられた自分が何故こんな場所にいるかなど、矢継ぎ早に質問をして、老人は丁寧に応えた。そして、

「間違っちゃった。まだ死ぬはずじゃないのに死なせっちゃった。メンゴ」

真面目な返答から一転、そこだけをおどけた調子で神様は言った。神様なりの茶目つ気を交えた言い方だったのだが、それは叶わずに彼の怒りを増させた。

「ふざけんじゃねーよ！俺はまだこれからやることが……」
と、彼は急に黙り込み、俯いて小難しい顔になり考えこむ。

投稿サイトにあつた、チート、トリップなどとキーワードに入つて作品を最初の数話だけ読んだ記憶を思い出す。

神様に会い間違つて死んだと伝えられる。まさしく今の状況そのものだ。その話での続きは、

「異世界に転生される？」

顔を上げ、彼は訊ねた。

「そうだ。間違つて死んだが、お前の居た世界では既にお前は死んだ身。死者が蘇ることになつてはその世界の理が崩れることになる。すまないが、違う世界で生きてもらうことになる」

彼の瞳が豆電球くらいに輝く。

「それはファンタジー世界ですか？」

「そうだな…、魔法によつて発展している世界をお前がファンタジーと呼ぶならば、そうなるか」

彼の瞳が白熱灯くらいに輝く。

「じゃあ、何か凄い能力とかはもらえるんですか!？」

「こちらの間違いだからな。お前が望む能力を一つ授けてやろう」

「ヤッホーイ！」

彼は声高らかに叫んで飛び跳ねて身体中で喜びを表現する。あまりの喜びように神様は首を捻る。

異世界。転生。チート。どれか一つが嬉しいのではない、それらが纏めて自分に起きたことが嬉しいのだ。

人気キーワードを含んだ世界を実体験できる。リアリティのある異世界トリップを題材にした小説を書ける。それが人気を博さない

わけがない。

夢にまで見たアクセス数とお気に入りを得ることができなくなる。それを思うだけで彼の表情は目の前に札束があるかのごとく明るくなる。

さあ、リアルな異世界ファンタジーの始まりだ。

彼が、異世界チートを書いても現世に投稿できないと気付くのは数日後のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8216u/>

アクセスがない男の話

2011年7月16日03時35分発行